

歴史は未来の羅針盤



第五卷「文化財編」は、第一章「美の香り」、第二章「匠の文化」、第三章「住の演出」、第四章「地に根ざす」の四章からなり、各公民館や教育委員会において一冊四、〇〇〇円（税込み）で販売中です。ここでは、内容の一部をご紹介します。皆さん、ぜひお買い求めください。

第二章第二節では、「石工たちの技 石造品」と題して日野町内の中世の石造品の特質について述べ、国や町の指定文化財である三点の石造品をその種類ごとに紹介しました。

### 米石と蔵王の石大工たち

滋賀県は、全国的に見ても「石造美術の宝庫」と言われ、特に鎌倉時代後期から宝塔や宝篋印塔が盛んに作られるようになりました。また、これらの塔の基礎には、蓮の花や孔雀・獅子などをモチーフとした近江式装飾文という複雑な文様が施されており、このことも滋賀県の石造品が高く評価される大きな特色と言えます。なかでも日野は、このような細かい加工に適した「米石」と呼ばれる細粒黒雲母花崗岩が蔵王で採れ、蔵王を拠点に活動した石大工たちの存在が知られています。現在日野で確認できる石造品の優品の多くは、

彼らの製作したものと考えられます。このほかにも石子山（小野）や岩倉山（近江八幡市）などの石材を用いた石造品も確認されており、蔵王とは別の石大工たちも活動していたことがうかがえます。

### 代表的な日野の石造品

日野に見られる石造品の種別は、層塔・板碑・石燈籠・宝塔・宝篋印塔などがあります。ここでは、装飾の特色が顕著な宝塔・宝篋印塔から代表的な作例を取り上げてみましょう。

昭和三十五（一九六〇）年に重要文化財に指定された正法寺（鎌



▲正法寺石造宝塔

掛）の石造宝塔は、米石で作られており、塔の各部が完存している貴重なものです。銘文によって、この塔は正和四（一三一五）年に造立されたことが分かり、また、基礎には蓮の花が開いた状態を示す開花蓮と呼ばれる文様が見られます。蔵王の石大工の早い段階での活動を伝える重要なもので、日野に残る宝塔の中でも、ひと際大きく風格のあるものと言えます。

一方、宝篋印塔の中にも、その規模や豊富な装飾において特筆すべきものが多く見られます。昭和五（一九三〇）年に重要文化財に指定された比都佐神社（十禅師）の宝篋印塔は、規模の大きさ、銘

文の多さ、装飾の豊富さのいずれもが町内の宝篋印塔の中でも際立って優れたものと言えます。銘文により、この塔は願主（造立者）らの父親の十二回忌に当たる嘉元二（一一三〇四）年に造立されたものであることが分かります。このとき、仏舎利を入れた水精塔婆二基とお経を塔の中に納めたことが記されており、このうち水精塔婆一基に当たるものが付近から発見されています。

また、基礎の装飾には孔雀文という非常に精巧な文様が施されています。細部の加工に適した米石の特性をよく表すと共に、蔵王の石大工たちの優れた技術を知ることができるといふ意味でも興味深いものと言えます。



▲比都佐神社石造宝篋印塔基礎の孔雀文の拓本